ベトナムインターンシップ報告書

小目次

1　はじめに
2　活動内容と体験記録
　2.1 ベトナムインターンシップ１日目
　2.2 ベトナムインターンシップ２日目
　2.3 ベトナムインターンシップ３日目
　2.4 ベトナムインターンシップ４日目
3　日本とベトナムのこれから
4　まとめ

1. はじめに

本報告書は、令和 7 年 9 月 8 日から 12 日にかけて実施された株式会社ユウワ主催のインターンシップについて、概要と活動内容、そして参加を通じて得られた学びをまとめたものである。

私は今回のインターンシップでの工場見学、大学訪問、現地の人々との交流を通して、日本とベトナムの違いや共通点を肌で感じることができた。

本報告書では、それらの体験を述べるとともに、本インターンシップで得た経験を元に「日本のベトナムでのこれから」について経済的、文化的背景から考察する。

2. 活動内容と体験記録

まずは、本インターンシップでの活動内容とそこで経験した体験の記録を述べる。

2. 1. ベトナムインターンシップ 1 日目

私達がベトナムに到着したのは、ベトナム時間で 13：30。東京から 6 時間ほど飛行機に乗りベトナムに入国した。飛行機内のスクリーンに映し出される地図では、着陸約 1 時間前にはベトナム上空に入っていたはずだが、私達が目指す都市はホーチミン。この都市はベトナムの南に位置するためもどかしい気持ちで到着を待った。地形の観点から見るとベトナムも日本と同じく長細い形をしている。到着前、ホーチミンはさぞ蒸し暑いだろうと想像していたが、飛行機から降りると雨が降っており、実際の気温はかなり涼しかった。

一日目は、空港からホテルへの移動後、夕食というスケジュールである。ホテルまではタクシーで移動した。タクシーで街を移動していると、日本との違いを次々に目のあたりにした。ここでは、中でも特に印象深かった事柄を紹介したい。

まず驚いたのは路上の賑やかさだった。賑やかな音色を響かせているのは乗り物のクラクションである。ベトナムではこれが日常的に鳴らされているようで、この国で 3 日ほど過ごしていると逆に静かな日本の道路の方が不安になってしまう。クラクションは他の車に自分の車の位置を伝えるくらいの気持ちで使っているように感じられた。また、横断歩道の停止率も 10%に満たないだろうと思われた。ただ、車やバイクも歩行者をうまく避けていっているので、ベトナムではこれが問題だとは思われていないようだ。実際ホテルまで向かう中で、交通事故の現場を一度も見ていないのだから、ベトナム人の運転技術には感心をした。（画像 1）

また、車から見える街の景観も日本と随分違って見えた。まず特筆すべきは、あちらこちらに建設中の建物や、空き地が日本の数倍以上見受けられたことだ。また、電車が走っているのを一度も見なかった。調べてみると、電車は数年前に開通したようだが、まだ殆どの場所では走っていない。これらの点から、ベトナムはインフラの観点で見ると、未だ発達途上であることが感じられた。（画像 2）

街には露店が多く、バイクの荷台に商品を乗せた移動型の露天商も目についた。現地の人に聞いてみると、ベトナムは家で食事を作る文化が少なく、外食が多いとの

こと。露店を見て、今ではほとんど見ることのできない日本の屋台おでんのようだと感じた。（画像 3）

画像 1	画像 2	画像 3

2.2. ベトナムインターンシップ 2 日目

2 日目は、ユウワベトナムと富士フイルムの会社見学を行った。

ユウワベトナム工場見学

朝 9:00、タクシーで向かったユウワベトナムは、整備された工業団地のような場所に立っていた。広い敷地には駐車場もあり、多くのバイクが駐車している。

私達がまず訪れたのはユウワベトナムの第 2 工場（画像 4）で、その中でも FAV1 と FAV2 という 2 つの工場を見学した。

FAV1 は、成形加工をメインで行う工場で、特に大型部品の成形加工・インサート成形を強みとしている。インサート成形とは、異なる素材・部品を組み立てた後に、樹脂を流し込み固める成形加工技術のことを指す。インサート成形専用の機械も見ることができた。（画像 5）ベトナムでは人件費が比較的安くつくため、組み立てのコストが抑えられるからだと説明を受けた。

この工場では、精密機械類を取り扱うため、出入り口に風を送る装置が設置されていた。私は初めて体験したが、壁の両側から強風が吹き体に付着したチリやホコリを取り除く仕組みのようだった。そこは細長い通路の様になっており、四角い部屋を想像していた私は驚いた。さらに、その内部で長い時間留まる必要もないらしく、通路を歩いて通り過ぎるだけでホコリやチリが取り除かれるという。これは、出入り口での渋滞を緩和するため設計されたそうだ。製造業界では当たり前のことなのかもしれないが、徹底した品質管理に感銘を受けた。

このように粉塵を避ける工夫は、工場の設計からも分かる。FAV1 工場は、1 階が成形加工、2 階が再生材を砕き混ぜるフロア、3 階が成形の材料となるプラスチック樹脂を開封し、1 階に通じるパイプに投入する場所だった。材料の開封・移し替え時に粉塵が発生するため、加工のフロアとは階を分けているのだ。人の力ではなく、仕組みとして粉塵が少なくなるように設計されている工場を見て、非常にスマートだと感じた。

FAV2 は、成形で使う金型を扱う工場だ。3 階で設計、2 階で研磨、1 階で組み立てを行っていた。この工場で印象に残ったのは、徹底した温度管理と金型の自動加工機だ。金型は金属部品のため、温度変化によって寸法が変わってしまう。そのため、室

内は 25℃±1℃に保たれており、その精度に驚いた。また、工場内にあった金型の加工機も非常に興味深かった。加工というと直接研磨機で削るイメージだったが、放電によって加工をしている機械があったからだ。（画像 6）さらに、なんと月の稼働 720 時間を目指す自動加工機も見ることができた。

ユウワベトナムの 2 つの工場を見学して特に印象に残ったのは、「材料の再利用」と「自動化」である。

まず「材料の再利用」についてだが、具体的なシステムが 2 つ紹介された。FAV1 の「樹脂材料投入・ランナー回収システム」と FAV2 の「研削液集中濾過システム」である。前者は成形加工の過程で出た不要な樹脂を 2 階で砕き、材料として再利用するというシステム。後者は研磨の際に出た排液をろ過し再利用するというシステムである。どちらも、工場からの廃材排液をできるだけ出さない取り組みで、環境への配慮を感じた。

「自動化」については、2015 年頃から取り組んでいると伺った。自動化率は、パッキングで 100%、検査で 50%、クリーンルームでの作業もかなりの割合で自動化が進んでいるようだ。今後の展望について質問すると、医療機器の部品をつくっているクリーンルームでは、人の手をできるだけ加えたくないため自動化率を上げたいとおっしゃっていた。また、ベトナムの人件費も年々上がってきているため、できるだけ自動化は進めていきたいと話していた。ユウワベトナムでは工場設立以来、従業員数が半数以下になっているそうなので「自動化」は全世界でのトレンドなのだと感じた。

昼食はユウワベトナムの食堂でいただいた。メニューは日替わりのようで、「鶏肉スープのフォー」「マカロニとソース？」「魚定食」などから選ぶことができた。雰囲気は大学の学食のようで、職員の方から料理を受け取ると自分で席を探す。昼に行ったので席は殆ど埋まっており、現地の従業員の方々も談笑をしながら食事を楽しんでいた。

画像 4	画像 5	画像 6

富士フイルム工場見学

食事後はユウワと富士フイルムの合弁会社を訪れた。

富士フイルムは写真フィルム技術をはじめとした「塗る技術」を強みとした会社である。こちらでは、工場の中を見ることはできなかったが、現地の日本人職員の方に、会社について丁寧に説明をいただいた。

メインで説明をしていただいたのは工場で生産している「体外診断薬」についてである。見た目は小さく四角いチップで、薬剤を塗布した布がプラスチックの板に挟まれている。プラスチック板の片側中央は丸く切り抜かれており、布が露出している。この部分に血液をつけ検査をするのだ。この製品の強みは検査に水がいらないこと。将来はアフリカを初めとする発展途上国に普及させていきたいとおっしゃっていた。

こちらの工場も、医療部品を取り扱っているので、低温低湿で環境管理が徹底していた。ベトナムの工場で行うのは、部品の組み立てがメインだ。薬の調合は技術的な課題が残るため日本で行う。届いた部品を組み立て、製品にするのがベトナム工場の役割だという。ユウワの工場でも感じたことだが、低い人件費を活かした組み立て作業がベトナムの工場では多いように感じた。

富士フイルムの工場見学の後はFUJIKURAという会社の工場も見学した。こちらも、部品の製造をする会社なのだが、メッキを塗布する点がユウワとは違っていた。

この日の夕食はユウワと富士フイルムの現地従業員の方々と懇親会があった。懇親会には、私の通う信州大学繊維学部機械・ロボット学科の先輩も参加しており、話がはずんだ。乾杯で仲が深まる文化は日本と同じなのだなと思った。

2.3.ベトナムインターンシップ 3 日目

3 日目は、大学訪問とBitexcoタワー観光を行った。

まずは大学訪問。訪問した大学はHutec大学で、都会の大学らしく非常に高い建物に数多くの学生が出入りしていた。ちょうど私たちが到着したタイミングでバンドの生演奏が行われていたため、信州大学とのギャップを感じ非常にワクワクした。大学内の一室に案内されると、すでに過半数以上の席が現地の学生で埋まっている。私達は空いた席に座り講義が始まるのを待った。時間になり学生発表が始まると、まず私から発表を行った。(画像 7) ベトナム語はわからなかったが、「はじめまして」や「これがすごく好きです」などの簡単な文章をベトナム語で練習して臨んだところ、想像以上に笑顔で聞いてくれ温かい気持ちになった。持参したお菓子を配る際、カタコトではあるが日本語で話しかけてくれる学生もおり (画像 8) 非常に嬉しかった。ベトナムの学生の発表ではスピーチが日本語で構成されており、全く仕組みが違う言語をこうも流暢に話せる学生のレベルに驚いた。この体験から私も多言語の勉強により一層熱を入れようと気合が入った。

その日の午後はBitexcoタワーに訪れた。東京スカイツリー、大阪の通天閣、台北101など大きな都市には大きなタワーがあるものだが、Bitexcoタワーも非常に立派なタワーだった。ユラユラ揺れるエレベーターで展望台まで登るとベトナムホーチミンの景観が一望できた。(画像 9)

タワーから階下をみて感じたのは、高い建物の数の少なさと、街を縫って流れるサイゴン川の重要性だ。

日本の東京スカイツリーからは、高いビルが広い範囲で立ち並ぶ景色を見ることができる。しかし、Bitexcoタワーからは高層ビルと呼べるほどの建物はちらほらとしか見当たらなかった。

また、タワーの近くを流れるサイゴン川には、貨物船らしき大型船を複数見ることができた。工業団地の中を蛇行してゆっくりと流れるサイゴン川は、都市における物流の要になっているであろうと考察できた。

画像 7	画像 8	画像 9

2.3.ベトナムインターンシップ 4 日目

4 日目は、VSIP・VJCC・戦争証跡博物館に訪れた。

最初に訪れたのは VSIP。ここはベトナムの工業団地を管理販売している会社で、会社概要からベトナムの経済状況まで幅広く教えていただくことができた。

VSIP はシンガポールからノウハウを取り入れ創られた会社で、主に国から仕入れた土地を整備し、現地・外資企業向けに売る事業を行っている。特に面白く感じた話は、最近の土地の売れ行きに関する話とベトナムの経済に　　ついての話である。

日系企業への売れ行きについては、最近落ち込んでいるという。理由として「円の高騰」と「自動化」が挙げられるらしい。まずは「円の高騰」についてだが、円の値段が上がることで日本への輸出が高く付くからだそうだ。しかしそんな状況下でも、食品系の会社は一定数契約があるらしい。その理由は、作ったものが現地の人々に買われ、現地の人々の口に入るからだそうだ。ほんの鱗片だけだが、国際的なビジネスの仕組みを知ることができて非常に勉強になった。「自動化」については、ベトナムで工場を運用する最大の利点は人件費が安いことなので、自動化が進むとそもそもベトナムで工場を建てる必要性がなくなるとのことだった。

これは本題ではなかったが、ベトナムの経済事情についても面白い話を聞くことができた。ベトナムは産業資本や民間資本がもともと少なかったから、外資系企業を受け入れることに全力をかけてきたという話だ。また、人の働き方に関する話も面白かった。ベトナムでは女性の方が働き者らしい。そのため工場勤務も女性が多く、共働きも当たり前だという。これに対し「ベトナムには子どもを育てやすい仕組みがあるのか」という質問も出て、その回答が盲点だったので紹介したい。回答は「核家族化が進む日本と異なり、大家族で生活している世帯が多いため母親が子どもを預けることができる親族が直ぐ側にいるから」だった。文化が働き方やライフスタイルにまで影響を及ぼしていることを強く感じた話だった。

VSIP の次に訪れたのは VJCC。名前がややこしいが、VJCC はベトナムと日本の人材の交流を促進する機関である。ここでは、現地の経営者をターゲットにした経営塾な

どの研修を行っているという。また、日本とベトナムのネットワークも築き、両国のビジネスマッチングも行っているとのことだった。

最後に訪れたのは、戦争証跡博物館。ここでの体験は凄まじかった。事前にベトナム戦争の基本知識や枯葉剤などの兵器情報も予習して行ったが、写真が物語る悲惨さは想像を遥かにこえるものだった。私達は学校で、戦争の悲惨さと同時にその背景にある国同士の利害関係、すなわち商売としての戦争の側面も学習してきた。しかし、いざ当時の写真を見せつけられると、そんな机上の話は意味をなさないほどに戦争に対する嫌悪感が私の心に広がった。たとえ戦争によって自国が豊かになろうとも、その過程でこれだけ無惨で非人道的な行いがまかり通っているかと思うと鳥肌がたった。と同時に、無知とはどれほどまでに残酷なことかという気もしてきた。私は日本人として今非常に豊かな生活をしているが、その豊かになる過程で戦争をし、国力を蓄えてきたことを思うとやるせない気持ちになる。戦争の救えないところは、一概に「対立国の兵士がいけないのだ」と断言できないところだ。敵国の兵士とて、行きたくて戦地に足を運んでいる人は少ないだろう。それは、写真の中の兵士の表情からも明らかだった。だからといって兵士に罪がないわけではないが、戦争の罪の一片は私も背負っているのだと言うことを痛感させられる非常に大切な体験だった。戦争を経験していない私達の世代が、「戦争はやってはだめだ」という教訓を知識として持つのではなく、このような体験を通して目に焼き付けることが、この先の世界を少しでも明るいものにするのだろうと感じた。

3. 日本とベトナムのこれから

これらの体験を通して、日本とベトナムのこれからについて私の考えを述べていく。まずは、マクロな視点からだが、ベトナムも日本と同じように今後少子高齢化が進んでいくと考えられる。そのため、医療やインフラの強化は必要であろうと感じた。また、DX 化や自動化も国を上げて進んでいくことが予想される。

次にミクロな視点だが、今後もし日本がより多くの海外人材を受け入れるようになると、ベトナムとの国際的につながりがより一層深くなるだろうと考えられる。実際に現在在留外国人数国別ランキングでは、ベトナムは中国に次いで 2 番目に多い。このような現代社会において、ベトナム・日本人間のコミュニケーションの大切さは言うまでもないだろう。私はこのときにお互いの文化を理解したうえで仕組みを作ることが最も大切なことだと考える。現地の工場での質疑応答で、ベトナム人の労働への向き合い方が日本人のそれとは異なることを学んだ。労働中のスマホ操作など、日本人からすれば信じられないことも多いが、それも文化として理解をしたうえでルールを作り調整をする必要があるだろう。また、言語が通じない場合でも「ビジュアルでわかるように説明する」など工夫できることは数多くある。

今後国際的な人の行き来が活発になる社会の中で、テクノロジーも駆使しながら文化の許容、理解が必要になるのだと感じた。

4. まとめ

本インターンシップを通じて、私はベトナムの経済成長の勢い、街や交通の活気、そして現地の人々の暮らしの温かさを直接体感することができた。日本とは異な

る社会構造や産業のあり方に触れたことで、自国を相対化して考えることができ、今後の進路やキャリアに対する新たな視点を得られたと感じている。特に、ユウワベトナムや富士フイルムの現場で目にした品質管理や自動化の工夫は、グローバルなものづくりを考えるうえで大きな学びとなった。また、大学訪問や交流を通じて、言葉や文化の壁を越えて人とつながることの喜びを強く実感した。

最後に、本プログラムを受け入れ、丁寧に案内してくださった株式会社ユウワの皆さま、引率いただいた方々、そして現地で温かく迎えてくださったベトナムの方々に心より感謝申し上げたい。さらに、本プログラムの実施にあたりご支援くださった長野県および信州大学の関係者の皆さまにも、厚く御礼申し上げる。こうした多くの支えと協力があってこそ、今回の貴重な学びと体験を得ることができた。この経験を糧に、今後はより広い視野を持ち、日本とベトナム、さらには世界の未来に貢献できる人材を目指して努力を続けていきたい。